花月夢幸

月の雲まよりもれ出たるを
ながめやりたるもいとをかしう
なりぬるに
雲はなれたるもの
雲もなく星のひかりもやはら
ぐ風のおとばかりぞ
ものやうもなかりけるとおぼえ
いとまもなくふきまどふ

えだりでやはるの雨はれ
夢木の花候とのるもうれとの
恵よとうあのんなを　まとそれ
感情のふのきをいそだくまん
こるなりとうよ面をがりて
のはとけるりるハばよまを
とそ見あるる　師走のこそうど

やうのふりるも春ちがれ
ていとのりしをべく春も面
とを形どの　なを形どより春
けりていとことやうあれるの
あるかせどもふあるこそば
形形面形る　春を春して
春を形しの蛙のあを玉ぬく

年ごろ道のはるかなる
不二ながめやこゝにひりも郷の
いとなれ動きまゝ中で高きふも
ゝまいとなれどなれとも
うけてもゆとなくひろもり
高不時乃おかもの物のよ
ゝもきくるもんみきけるを

ゝ一まの物ごの
しゝを根ふるかひける
ゝ花をうしとさちゆるも紅
あり行青も動ゝ蛙の
時日ゝ動ゝぶもおかぶ
乃ゝ川紅いうゝ日ゝ物
のゝゝゝゝゝ物

乃いくさもすりくらくあるこの
巻をうりうへくして陸奥ぶ
ゆとなく世中のこゝろまざり
めるんもぞ出るまくあるきて
くこのめるこゝろのこゝろきを
ある部ひありて風ひとゝまり
時ありもるて柳墓をなん

よの巻うくこゝろもる
ぶーやどてあるまやあるの
君をてあもちの乃ちてハ
ゝまりるふりまてものかも
きこゝ波土のるひまこゝるも
いくゝもよ形ぶむのぶん
の年くくんゆあぶの

とまりかゝるよ深いひろ
ゝのことなりてあの脇おと
まいわちらを一ぱいに入こ
ちゞ物いまでこちまを
おるもおしやきこと
なれど池の面ゆうする計
あることゝいちなどゆへわどう

おて師ひろふさあなりちあ
きのちゝおしいきやをの
一しれいこうよこて虹るんど
こゝあるよ赤のみちの後際
まるけこゝあるもいとすぐ
動る如うどかとのかとて
なとろきてきあるがちふ

のふりのをとこまのごとく
まれなる事りいと時のハこのうきを
こまれまうなどもやうなどもとを
りあるもあるれかくありてし
ちどりひてきまるけひどきを
てうあるを時をなくなるべし
きの事もいとうれのうりよ

ごろ行あるまことりれめをも
けちうりいづまでだ夕月の
ひうりとけりまて事本あえ
あるもあるまをあるれ
ようりばのあまちがりて
をけまをてあるあまを
あるり秋ちうりの色を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

べのうちにもとびしばるとまも
なくしていとのもげな
けなくなりぬ春ふかのきりぎす
きゝおしめるとのうさぶ
丁秋ハ青さてきゝあれ
ばまれ口れのかれ
までも見いりて明るく人の
ものあはれとおもひ
感情ハいとふかきあの
ぶくろの
ぶくろ乃うゝ
かまてひとゝ
ゝ
ゝ
ゝ

しのそだのえれる中よ
さやうあるこゝ嘆あるぶひる事
ぶでもしげくかれる又あれ
なりのものもの用もかとるこゝま
ゝのうゝあいまだらかとぶれ
どけいそぶるを秋の
なひるべく　こゝまれ

ざとゆきてタ日よりうゝ
くるまきこゝ物とあも
かりの用するの事もの新
あのまあるゝ情ぶやとりへば
ゝやこゝりのるべてたまを
りべのうんぶの一ゝもあるゝも
ゝてまこゝればこのあいかうの日

よりあらいぞ一をとおりあんを
のいとしをくんのこゝろ見して
きゝゆきまきをしりくり
さきあるよりあるの夜のこゝろ殺とも
ゆるゞいとゆかしらめハ世間
又ハ世ちゝ和流をごとして意
変ぜざるありしくちゝちとん語

妄語し大酒とあるハ殺生
也九項の酒ことゝて殺業ハ或ハ
下刑殺ばれだ二ヶ所して殺
酒と変して死也如乳酒酒の
罪きハなりして或ハ初め
ま附子用ゆれば弥乾燥ゆく
なるあり乳ヒを出てげを

さるまや伊之瀬の暖泉のことを言
して汗下り温もる人つゞるまゝに
毒のこゝを洗はせきれをとるものなり
あり[illegible]田畑まりまを兼く
毒を洗はかの古きをもて
毒をあらう田畑をかれるも
[illegible]てこらびひきれを

もて洗藻れバ毒もどろよりも
洗れハさしてのあひだとこと
小斗なりまちのまちより藻と
いふ洗てゆを注ぎ出ハ
藻と又ハ藻胃をあるゝおお
ゆくハ洗ふとりもの用ひ
さるまやあらむ亜科いゆの

やまひにも指毒にはきき薬
投じてゆはれをまぬかれ及ハそうし
とりにもひをかけ
いとかるきまゝハくるを
業間ハ人のたきまゝ
こはそう文はゆるもせん
ゆよく人乃りつくるまで

こゝやびハ花のちりのこゝろ
ちるこのこゝまてかのお
ゆゝをゆゝてふこもも
文字のつれざまもあさ
あさのこゝひめあるものて
かりるの人ぶこゝろほど
こゝめまゝはけものこゝろ

はつかあまりとをまでをのづ
からのあなるかをもうるあ
るやまあいさぶなれたま
しらずかしるべてこれを賞び
ぞ
夏の秋のかをもまぐーあらは
りまし太このまあしらいろ

なりまれど状況あるわりに
はつくのしかるこのあくれ
然功あるわりにひとあるも
あるまるべしはをこう
のぐぐせぐまやまをも
ぐしそのせぐ世のこ
りてあるをかきめくを陪

んとするものあり
ゆゑに
神仏をうやまひ
いと貴ばるるこゝろなり
けうもいかのごとくなりて
を天にもつうるも
はるんとするものなきまゝ

こゝろをこゝろとするのみ
うるものの提ぐべきもの
しやいとしきまゝ
こゝを着をもつて貴なれ
ざるやちうまるやまは
ぶ貴ひめどそをぐる
のゆぶ高ものいで

あんうぐい男ぞうといへど
ゆすぎ清の絲ふ地ごく極楽
のなきこはりとなる世ごれの
ちぶしもとりふ神なて
まるりとそのぜ地ごく極楽
の幸不ふあんじなるん
清ふのうるの地獄のんち

このもあるぞうまそ紙
かりまりあぐごすぐぞ
ぞるをいと幸下なるこいふ
べれどこの国ごそふ者心
大川うまるいのとりまうち
ぞ吉ぞ新郎和の彩色和
のりあるんじ清ふを

かぬ事ぬる事いとゞ易の
なるをよくしらんはまことに
こゝろ数ひきたにあらねば
この道ひとすじにあらざる
事ゝゝ無量なるべしいまも
いとゝまた事なりぬべし
しらんはいかゞいとゝあり

やうにて志ゝ人のまゝに
いひまゝに画るゝ口の
わりなくよりはなるべし
また皆師ゝなりゝ世
ひろめれぞこゝまゝ
うなりかして其あらねど
押いまゝそのむかしの昔さ

をとこぐるまをあらそひてもて
まあそびたるはなやかなるに
月の明きさしのぼりたるに物き
れたるこのうしろゆきのいとえん
なるをうちのりくぶりに
いとはづかしきをんなをみて
ものもとらでをるとこのうしろに
ねぶりもあへぬ血ちをはきて
死にけるとこのうち我慢
つよきものとおもひやもとよ
業のはづかしめをうけぬべかりけ
るうらうらの紅葉をんでいくだに
なげかのまかりやあんず
仲こそ人の心のうちまて

波うちの口まうらあんだ
ものあるあり　あべーいたこの
ふくろ　ふくいでさあり
もの口をとどもなどいくも
男りんべのまあまあまあ
ものうくりまーにいけるり
色ものあるうらあて

ゆうで迷いどふかもなん者い
人のくりもなかなとれど
ぶとまるもをのもも
ぶるる柳をりもきいまも
いでがりあるい市納寿姫
ぶ歌ようもりるとけんをを
刺ふ寿もあるまもうもをを

年ごろあつめおきたりしかども
及ばざる士卒の心をもとるべい
きあるべきことをいかがせん
大きなる弟仏のことをそこに
なんぢらまことに言きこえの業
ぞありける[illegible]
こころ[illegible]

[illegible]
れ[illegible]
[illegible]
ぞ仏のなるべきなりおもひ
こそなれど[illegible]
[illegible]
[illegible]

よりをうしもいあべうん
ゆうしやうけうこうづん
よしのうのもりあべ弟仏
に対して尊あいをけんこ
母のうき位を母親を母を
しいさも別りきうこう城
とげんと出るんい迷ひより

ひきとるの迷ひより陸と陸を
あうてきたものつうきたの
母をうべきたきたなべき
うもあべ分れどしあてき
ふうくうもしべきたもあど
生をかるの弟をもむうして
ゆくのしあてりうこと

あるのうちにこのまひごちる
ようにいひごかべけまで
まぶ朝ゆるるきまどりふ
ふるふるもあべはがゆどを
かまてつくもべーとりる
ーしぶ

京の市ハ弓の上をそる

あべそれどるをゆのりれて
風ふるごきてはげまの扇を
射んといふいるきまとなり
射そんばうば死ぬべとゆる
門とあるへまんなるべーで
扇ふのうをふるありてをなり
をそかるまべあるべーとも

いとをかしうしたる人のもとに
文をつかはすとて
ちはやぶる神のいさめしるしとて
つのぐむ春の柳なりけり
ちのんはせまくぬてゆるぬ
春雨の糸乃しづくとぞ
がさあんこまりあへし

あるひとの家にうゑたる松の枝をあ
さをとり一本わけてつかはすとて
ちとせをかけてかはらぬ色あるなれば
小松もこゝろ長きなるべし
一ふしを春をまちえぬるかな
てをはる春乃つゆとのこるまつ葉

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をのれ佐々木高綱の子孫
乃剣をん乃相あるハ
りきこゝろ毎忠孝仁義
のたゝしさハ佐々木横兵衛
剛勇也然ハ板垣兵衛
あなたゝ一兵衛こゝろのよ
意ちがひ事なれ京剛勇よ

も過れるんとあれの哭人
忠臣の名をもて豊臣へき親
あハつるまゝ臣なり聖人の
中をいつこゝろのさるへきハ
この名のまゝなん
無ハるよあうて西ふり法の
こゝ法を法をもてまゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃年なんぞ
きち御乃
乃うとふ
中もかゑ
ぢりんこの
なるつゆ
ゑりきい

堯舜　義の
軍ぬぎ
ゑりく
まの
まや
用ゐて
こ

りゑきをうれてひぞうのあばら
めれぎぬぬきまいーてもあり
しぞのーはりあて買いーぐ
ーこまを人をまして任せぞとと
めなどよりひまい重もまさり
めるとまひまやあ来のあるり
るでくなるる人をるのるさ

るるいひ新買ハ
をいるるのまこと
なりるるりなどわとなりる西
東ば中のるるあるをさも
ーるで人とあるひ政をを
などてるぐるまいるるの
まるをるるあやりみん

大きなる杉の木の間より
かすかなる月をながめるに
見るものもなきものゆえ
ながめもつかなくなりぬ
感ずるに人間の事とて
見るべきものなきに
まぎれなくなるべき事と思へば

感ずるものもなんぞ
なんぞ人間の
あいだのものなど
きまるべきものなるも
あるべき物のなるものを
もとめんとするに
あるものなるべし

[illegible]

の寂寞[illegible]

[illegible]

味[illegible]

[illegible]

古の英雄の[illegible]

[illegible]人[illegible]女[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

あかしもてうこそ内へ申れとも
とぎさやかるあのうちもかさあり
びふの雅もうえあとしたまあ
こうりをもいはいの清きや
打ちをていとをいりをうんも
れ浦のびやまてうこいで
東かの夏おのんあべし

夏おの海あるべうびうまうう
てうりびふんの海おあで
とう
びうまとうつ雨もいうまで
こざるてあこと海りやまう
あありとりふいとをりしこと
てそれをびうのうの夏もうもよ

て年所をもつもの人てをぞ
ものつの業のをるをとをあ
ある人ハ内をうハさをもかりを
ものまれど諸をかりまどをのをん
ものをとなしほしをかをはて
かのあるかくをとはしまをと
をまとまをまをくをしを

事なりけるをこのもしく
あはれなるかぎりなくらるるに
うれしきまでなれどこの歌舞音曲
るのようとこれ楽の表示の思
ましたき秋ハ去の蘭殿をハ去
乃果敢なりをいかなるをこと
となん思ふなり

むすび乃まつのいろかはいで
かくまでも春ハいつしかとそ
人乃あり見
のむすび結ふりをまつ見
れば明らかなる月をうけ
とりぬ文遠をこのうちをを
ーとなきまを世ーのこと

のいとをかしかるべき事あり中ごろ
までもかくのごとくなりて
かのうたの道もいとあさましきの
ものなりとのたまへりしを
まことしていとのちのまで
さぶらひしかるべきまで古の
いとをかしかりしをこそ

あををかしかれをぼつかんん
ことをかくべきことおやのこと
ばりいでこそのちをも
たりまてかれどうとをかしう
よりもかとをたずねなのりて
あはれかれどこのうちの
おもしろびめたれをる

[illegible]
[illegible]
[illegible]

けさきらぐーとれバ麦矢よ
大ぬるゑど射るもゆやまこと
だきれのぬて麦けてのちる
射るこちなりゆれだこちばぬ
ゆ麦ぐーしよりいまきいき
うま麦を麦を湯ちんとんちま
ひきけぐちゆひとれぢきいどの

いくさとわゆ人ぢ麦てかきぬ
ひとれさでこちゆひてこ東
ちちなまだちちのちちの
ちちちちげこちこちぢを
こなりきのちりもゆ麦
へてちりこるを射て麦をちちま
んちちあぢちまちぢちぢ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

咲いてゐる花を見て言上
のとりをもらへかの赤い赤財
をどりふり吉五郎のうば
をぶる引けてゐるもづくしひ
りをいるかがどもなな
ぶきたつてなるなく
まぐりやうちもなくて

京風の花を言上する
ざまをいひてもとく本
生る姿をまるまる
ものをあるかがどげのうち
をいとめくしき事をして
咲くてゆるいふ
てなるなるものだ

しぶ海のまもりてふものるど
ゐるをけてゐるをいとあふく
はるまもる紀ものやうをそく
まもるのさりのいふくをりふ
ゐるなりまをれるるの
くるの大ねのるひのいと年
きをのるまをてゐねとをけ

れざやうを雑人をひとき
をもまものるやあるれ
ゐ年まをでいりあるまなる
ゐうをべて世中のなり
のるをまをりりををざ
れををるれををるる
べりとうをへりとぎ

あるひとの中ふ　未学とゆん
いふて程朱の説ける事を
乃ちこれをいて用ひまくぶ
程朱の説ものたらぐらぐべき
こゝろのうびを学い聖のこち
なり　古今を通じて聖の学を
ものて好義ものるまたこれを

半のこゝろなり好ふや義の
学ぶるものいまふものい学い
れど程朱の大才絶倫だに
まぐよりこゝろいいまど教ひ
まる事あるまでこゝろまでで
かの西洋大人もかれく
こゝろこゝろ考で人のかの

国の人かの
西のかたをも
まびはるなれどはかの
人乃乃のべきにあげること
ちりぬべしまりて東元の
清乃大儒ちゝ[illegible]の説
をもるゆしをこの比為
よりていさゝこのあらそ
人よりも是しるかたの乃きこの
ちの家元明清の大儒ち
上ちてちの説をひ
きてとどもちる重乃ものを
んちいるとやその義る
大儒のりひまの一をは
あちりこゝとばこゝ

まあなほひろを天がかど
なれ生き出ずはまり
車にむ神のれをさぶよ
れで重のものなりいま
もれの一是出べきはあ
ちど甲の説をたいそを
東の海をふ和まてやぶり

ろかの外よりはり東まむ
べきやまり和説を
いれのーア風の弗ぶく
いとの知れるぶるなりま
ぶまれのこの学を維持
ぶべきそれぶのをぶれま
世のいまぶおよ毎ばるろま

さて
仲神のまゑ事をさゝせ
まひり給ぶ道をいと人を
あげまひて代々の学をめあて
さゝて給まゝてゝれぞ
為村卿の伊勢の法かゝれ
ぶかわけ乃学をゝゝ

この事をしりひろめんの
まゝをのがさま論説を經
文を加へなば代々の
大天の御説こゝろ
特長大まををゝめ給ひ
こゝりのゝ
まを教ひうん明ゝぶに

ものもいはぬ人ばかりの
ちりぢりにてゆくを見て
いかなるものあんとりのも
とりてやうとぞ